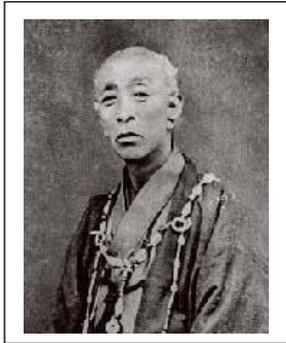


蝦夷地を探検した人々 その2 松浦武四郎

八柳 修之



松浦武四郎は文政元年（1818）：伊勢国一志子郡で郷土（いくさ以外の時は農作にあたる）の子として生まれた。父親、桂介時春は本居宣長の門下として国学を学び信心のあついで知られていた。13歳のとき塾に入り論語を学んだが、天保4年（1833）16歳のとき塾をやめて上京、てん刻（これがのち、役立つことになる）を学び、帰途、中山道を通って善光寺、戸隠山に登り戻った。武四郎は四人男兄弟の末子であったので自由な振る舞いができたのである。天保5年（1834）京に上り、大坂、播州、備前をまわり、四国に渡って、讃岐、阿波を訪れて、淡路から紀州に入る。

以後、天保10年（1839）まで北陸、関東、東北、中部、近畿、四国、九州をめぐる歩いた。伊勢を出てから10年間、武四郎は実家に便りをしなかったが、天保14年（1843）、初めて手紙を出し、兄から両親が亡くなったことを知った。故郷に帰ることを決心したのは、もう一つの理由は長崎で、「このまま蝦夷を見捨てておけば、赤蝦夷（ロシア人）に奪いとられる」という話を聞いたからであった。2月、武四郎は母の法要が終わるや伊勢神宮に参拝し、京都、北陸道、越後路を通って、妙見山、磐梯山、蔵王山、湯殿山、月山、鳥海山、森吉山などを登り、その年の9月、津軽の鱒ヶ沢に着いた。（多くは下北半島の三厩から渡るのだが）しかし、海が荒れていたこと、蘭学者高野長英が脱獄し指名手配が全国的に厳しかったことなどで蝦夷行きを断念し江戸に戻った。あくろ弘化元年（1844）年3月、江戸を発ち奥州街道を北上し鱒ヶ沢に。4月の始、松前に渡った。松前では自分の籍を江差の人別帳に入れ奥地に入る準備をし、馬で海岸沿いに礼文華、有珠、室蘭、勇払、沙流、日高の海岸を通り、襟裳岬を廻って十勝へ。さらに釧路から厚岸を経て根室へ。ここから知床まで探検し、「勢州一志雲出 松浦武四郎」と書いた柱を立て、10月の始め箱館に帰って来た。

11月、江戸への帰還の途中、水戸に立ち寄り、水戸学の大家、会沢正志齋を訪ねた。このことは、今後の武四郎の蝦夷探検、水戸藩にとってもウインウインとなった。江戸に帰った武四郎は「初航蝦夷日誌」十二巻を書いた。



幕末の探検



神居古潭義経神社

弘化3年（1846）29歳の春、正月2日、武四郎は江戸で知り合った江差の医師、西川春庵が樺太勤務になったので、その召使いということで樺太に行くことになった。5月の中頃、宗谷に着き5月の終わり頃、宗谷から、およそ72km先、樺太のシラヌシに渡り、クシュンナイで引き返し、7月19日、宗谷に戻った。その後、武四郎は、一人のアイヌを連れてオホーツク沿岸の枝幸、紋別を経て知床まで行き、8月13日、宗谷。陸路で石狩に着き、石狩川を舟で千歳まで、東海岸の勇払を経て9月、江差に戻った。この間、武四郎はアイヌ語の勉強に励ん

だ。弘化4年(1847)松前から南部(岩手)に渡り、津軽、越後、佐渡を廻って江戸に帰った。

嘉永2年(1849)2月、第3回目の蝦夷探検に旅立った。途中、水戸へ立ち寄り奥州街道を北上、三厩、松前には約2ヶ月かかって着いた。3回目は主にクナシリ、エトロフを探検し、6月15日、箱館に着いた。この探検は幕府の指図によるものではなく、自分意思によるもので費用がかかったが、陰ながら支援してくれたのは水戸藩であった。その後、武四郎は蝦夷地での探検の記録をまとめ、嘉永4年(1851)「三航蝦夷日誌」35冊を水戸の徳川斎昭に差し上げた。この頃、アメリカからの使節ペリーが浦賀沖に来航していた。嘉永5年(1852)武四郎は江戸をたち伊勢に帰った。しかし、安政2年(1855)の暮、蝦夷地箱館奉行所の御雇を命ぜられ、あくる年、2月、江戸をたち4回目の蝦夷地探検を始めることとなった。幕府の狙いは松前藩に代わって蝦夷地を直轄地にしようとするのであった。安政3年(1856)2月6日、江戸を発ち、3月5日、箱館に上陸、4月1日、箱館を発ち陸路で西海岸を調査しながら西へアイヌの案内で宗谷からカラフトに渡った。武四郎は5月25日、シラヌシを発ち東海岸を、前来た時よりも奥深く北に向かい、シツカ・タライカの辺りまで見回った。しかしシンノレト岬を越えて、それから北へ行くことが出来なかったため、西海岸に出て宗谷に向かった。その後、宗谷からオホーツク海岸を通過して網走に着いた。網走から山路を通り標津に出て野付から舟で根室に渡り厚岸に着き仙鳳址(不明)に上陸、東蝦夷地をまわって10月13日に箱館に着いた。これが武四郎にとって4回目の探検であった。この旅で、武四郎は琴似というところを見て、ここに都を建てたら良い環境であると述べている。また、アイヌ語を完全にマスターし、いかに松前の役人、商人、請負商人があくどいことをしているか、このままではアイヌが絶滅してしまうという事を耳にしたのであった。



屯田兵とその集団住宅

都市名の由来(アイヌ語の意味)

札幌: 乾燥した大きな土地

箱館: 湾の端

小樽: 砂浜の中の川

旭川: 朝日が昇る川

釧路: 温泉、薬、道路

帯広: 川尻がいくつも裂けたところ

江差: 昆布、突き出した岬

根室: 樹木が繁茂するところ

松浦が作成した北海道国郡全図は明治20年頃まで使われていた。

安政4年(1857)40歳になった武四郎は前年の暮に倒れることがあったが、2月、「北蝦夷日記」9冊、幕府に納め、4月、幕府の命により再び佐賀藩の侍を連れ西蝦夷に向かった。今回の狙いは、蝦夷地の地勢を調べ、その土地にあった産業開発を提言することであった。武四郎はもうこの頃アイヌ語を完全にマスターしていたので、アイヌの声をよく聞いた。そして6回目の蝦夷行きを最後に江戸に戻り、42歳で旗本福田氏の娘と結婚した。武四郎は6回の蝦夷探検で残した日誌114冊を「東西蝦夷山川地理取調紀行」として22冊にまとめ、地図は緯度経度各一度を一枚として28枚の「東西蝦夷山川地理取調図」として刊行した。これにより、初めて内陸の様子が細かく分るようになり、この地図は明治中頃までも使われた。蝦夷探検の記録を一通り整理した武四郎は再び明治元年(1868)6月、新政府の蝦夷開拓御用掛、8月には開拓判官に任じられた。これまで「蝦夷地」「蝦夷が島」と呼ばれていたが、明治2年7月、武四郎は「道名の義につき意見書」を出し、「北加伊道」とするのがよいとし、それが「北海道」という呼び名に、また「北蝦夷地」は「樺太」としたのも武四郎の意見によるものであった。明治3年(1870)北海道探検とその著述の功により終身十五人扶持になった。その後、武四郎は隠居の身となったが、余生は富士山に登るなど幸せな生活を送り、明治21年(1888)71歳で亡くなった。

武四郎の功績は北海道に地名 9,000 を収集したことが挙げられるが、この間 10,000 km以上踏破した。

追記：清朝、朝鮮との国交樹立や南方との国境画定とともに、明治政府にとって、ロシアとの北方に領土問題は重要な案件だった。特に、樺太（サハリン）は幕末以来、日本とロシアに属する雑居地とされ、所属が不明だった。日本は、これまでの北蝦夷地という名称を樺太と改称して、1870（明治3年）、樺太開拓使を設置した。当時、樺太在住の日本人とロシア人の間では、紛争が度々起こった。アメリカやイギリスは、もし日本がロシアと戦争すれば、樺太はおろか北海道まで奪われるだろうと日本に警告していた。さらに、朝鮮や沖縄の問題が新たに身近に迫ってきていたので、新政府はロシアとの衝突を避けるため、1875年（明治8年）、ロシアと**樺太・千島交換条約**を結んだ。その内容は日本が樺太の全土をロシアに譲り、そのかわりに千島（クリル）列島を日本領にするというものであった。その結果、カムチャッカ半島のロパト岬と千島列島の占守島の間が、両国の境界となった。新聞は「ああ、樺太は放棄せられたり」と嘆いた。また、日本は1876年（明治9年）、小笠原諸島を日本領とし、各国の承認を得た。

北海道の開拓：新政府は1869年（明治2年）に蝦夷地を北海道と改称し、士族・屯田兵（明治期、北海道に配置された農業兼営の兵士）の集団移住や諸産業に開発を積極的に進めた。維新前後の人口は、アイヌが約2万人、日本人が約10万人と推定される。半世紀後、北海道の人口は約236万人に達し、農耕が可能な土地は、ほぼこの期間に開拓を終えた。（「新しい歴史教科書」市販本 扶桑社）

参考資料：宮本常一著「辺境を歩いた人々」 河出書房 写真はすべて無料画像

地図：帝国書院発行「ワールドアトラス」訂定4版 「新しい歴史教科書」市販本 扶桑社